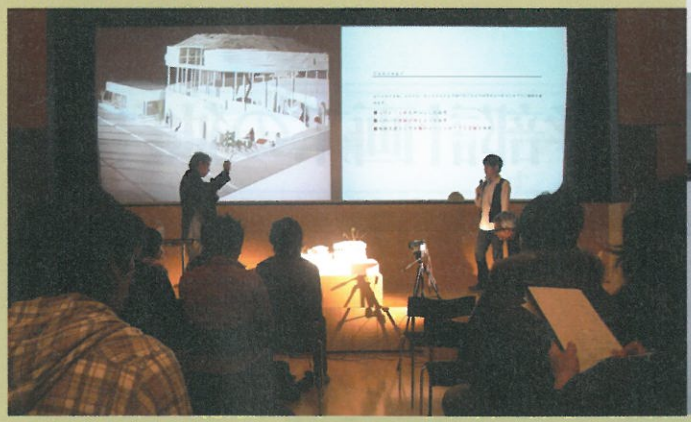
桜建会報 OKEN

日本大学桜門建築会
http://www.okenkai.jp/

2011-March No.90

第2回日本大学桜門建築会学生設計コンペティションの最優秀賞「境界線上の物語　境界線はアクティビティーをつくりだす」村山寛子・三角奈津紀（左上）。2次審査でプレゼンテーションをする学生（左下）。同コンペの優秀賞「山の上に立つ木とそれを囲む階段の家」遠藤孝弘（右上）、「75m　テーブルハウスまちの喫茶食堂」森本栄貴（右中）、「だがしやの家」南雅博・清水良輔（右下）



contents

特集／日大建築山脈
［計画系I］ 山脈図&インタビュー
若木滋名誉教授 × 浅野平八教授 × 広田直行教授――2
トピックス／第2回日本大学桜門建築会学生設計コンペティション結果報告――8
研究室紹介――10
事務局だより――12
2010年度斎藤賞・加藤賞・桜建賞受賞者一覧――14
学部ニュース――16

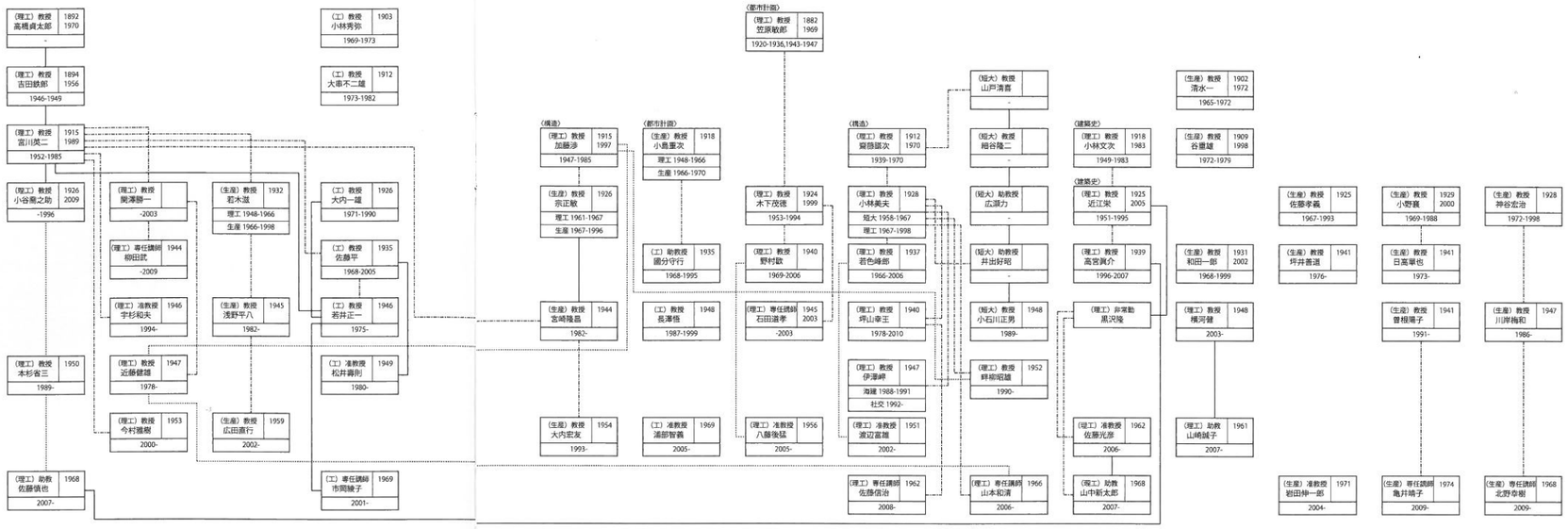
特集 日大建築山脈［計画系Ⅰ］

86号から始まった特集・日大建築山脈は、構造系、都市計画系、環境・設備系、材料・施工系、歴史系に続き、最後の計画系を、今号と次号で紹介します。

計画系の第1回インタビューは、工学部（現・理工学部）建築学科を1951年に卒業後研究室に残り、生産工学部の創設の際に計画系の専任講師として着任し、40年余りにわたって教鞭を執ってきました若木滋先生をお迎えしました。聞き手は、生産工学部1期生として学部・学科の歩みをつぶさに知る浅野平八先生と、生産工学部で生まれた計画系研究テーマを引き継ぐ広田直行先生にお願いしました。

若木先生が本学に入学したのは1951年。社会は未だ敗戦の傷跡を残すころでした。学部卒業後、宮川英二研究室の助手時代に前川國男建築設計事務所へ出向した経験や、宮川先生とともに駿河台5号館を設計したときの印象的な出来事。そして生産工学部創設時の数少ない専任教員のひとりとして尽力されたことなど、創設時と70～80年代のトピックスを交流された先生方のエピソードを交えて語っていただきました。

山脈図



■系図作成にあたって・教員名は原則として専任講師および助教以上のみ記載
・線で結ばれている教員間は卒研および修士・博士論文等の指導関係等
・桜建出身で他大学等の教員は除く
・生年、教員年の空欄は本人の希望および不明

インタビュー

多様な教授陣が創る生産工学部計画系の独自性

若木滋名誉教授×浅野平八教授×広田直行教授

2011年1月13日、生産工学部5号館3階、広田研究室にて

1950年代初頭の計画系の講義

浅野◎若木先生が理工学部に入学したのは何年でしたか。

若木◎1951年（昭和26）です。そのころは食べるものが配給制で、食糧切符をもって学校に通いました。1年生の時は教養学部が世田谷と三島（静岡県）に分かれていて、しかも夜学もあったから、それほど多いとは感じませんでしたが、2年になるとすべてが集まってきて、1学年400人くらいいました。すごい数だったなぁ。

広田◎そのころはどなたの授業を受けていましたか。

若木◎構造は江崎伸市先生で九州弁の授業がとても印象に残っています。当時、教授は何人もいなかったように思ったけどね。3年か4年の時に、坪井善勝先生の構造特論の講義があって、黒板に書かれた数式がぜんぜんわからなかったよ。でもね、どういうわけか試験を受けたら優だった。（笑）

広田◎若木先生は戦後着任した吉田鉄郎先生の講義を受けましたか。

若木◎僕が学生の時に吉田先生の名前はあったけど、もう病気で学校には来ていませんでした。だから見たことがないんです。それでもお葬式には出たんですよ。亡くなったのは、宮川先生の助手をしていた時。参列者を送迎する自動車係でした。

浅野◎吉田先生の最後の助手は、生産工学部に来られた佐藤孝義先生や宗正敏先生でしたか。

若木◎そう。病床でドイツ語の本を書いていて、その本用の図面を手伝っていたようです。でも、あまりうまくいかなくて、さんざん怒られたって聞きましたよ。僕ら世代は吉田先生を直接知る機会には、間に合わなかったんだ。

広田◎計画の授業はどなたが担当されていたのですか？

若木◎建築計画は2年生で受けるんだけど、僕の時は市川清志先生が漫談のようなおもしろい授業をしていた。今でいう概論のような内容ですよね。「建築家はカッコいいし、素

晴らしい仕事だよ」って話をされて、僕は感動して聞いていましたよ。学生もみんな市川研に行きたいって言っていました。

浅野◎そのころの市川先生はとても人気があって、3キヨシって言われていたんですよね。東大の池辺キヨシ(陽)、東工大の清家キヨシ(清)、日大の市川キヨシ(清志)と。

広田◎市川先生の前は、だれが建築計画を教えていたのですか。

若木◎いないのよ。宮川英二先生が1966年に『建築計画ノート総論』を出版したけど、体系的に整理された建築計画学は、この本から始まったのではないでしょうか。

広田◎宮川先生の授業は受けてないのですか。

若木◎宮川先生が初めて建築計画の授業をやったのは、僕の一年下の世代です。関沢勝一先生の時。だから、僕は直接授業は受けていないんだ。

浅野◎『建築計画ノート総論』は、初めての建築計画論なんですね。

若木◎そう。国際建築論も入っているし、素晴らしい本です。

Wakaki Sigeru
1932年新潟県生まれ。55年日大工学部建築学科卒業。83年「公民館施設の計画に関する研究」で工学博士取得。84年日本建築学会理事。85年生産工学部教授。94年日本建築学会関東支部長。96年東京都設計候補者選定委員。98年日大総合科学研究所教授。同年、道路施設協会理事。2002年日本大学退職。名誉教授。2003～2004年建築業協会賞選定委員(BCS賞)。大学在職中、習志野市・船橋市において、各種委員を歴任。自治功労賞、行政功労賞を授与される。

浅野◎未だに読み継がれています。

広田◎このころ東大の吉武泰水先生のスクールも始まっていますね。

若木◎そうね。木曜会なんかがあってね。

広田◎この本が出るまでは、建築計画というより意匠設計という意味合いが強かった。

浅野◎『建築の設計』の「はじめに」は前川國男先生が書いています。日大の計画系の先生方の多くが関わられていて、僕たちの世代の教科書です。僕は生産工学部の1期生として、1965年に入学しましたが、この本は66年の発行ですよ。

広田◎日大の先生方が協力してつくった最初の計画の教科書ですね。

助手の身分で前川事務所へ

若木◎学部を卒業して宮川研の研究生として残っていたけど、実務を早くやりたいと思っていました。1年先輩の高橋義明さんが小谷喬之助先生と一緒に1955年ころ学会のコンペで1位をとったんですけど、そのコンペを手伝ったり、芸術学部の写真家の渡辺義雄先生の授業を潜り込んで聴いたりしていました。

広田◎宮川先生はいつ研究室をもたれたのですか。

若木◎1952年です。大学に来る前は鹿島建設、それから伊藤喜三郎設計事務所に勤めていて、日大に移ってからも事務所に自分の席があって、大学にちょこっと来ては授業をしていました。

浅野◎若木先生は前川國男先生とのつながりが深いのですが、いつ前川事務所に行かれたんですか。

若木◎55年の卒業後、大学に研究生として2年くらいいて、それから前川事務所に行ったんだ。1年という約束だったけど、まじめに一所懸命やったのを評価されて、足掛け3年在籍することになった。当時、前川先生の片腕だった田中誠先生がふたりだけの時に、「若木君、みんな怠け者でしょう」と言うんだ。当時スタッフはお金持ちの息子が多かったから、休んでヨットをしたり、ゴルフをしたりよく遊んでいた。でも僕は、朝は一番早く出て、夜遅くまで図面と格闘していた。前川さんが夜遅く事務所に来たら僕しかいないこともしょっちゅうだ。だから「若木君のような人がずっと残ってくれるといいんだが」と言われてね。それでも大学から前川事務所に出向するなんてことは前例がなくて、実現には斎藤謙次先生が了解してくれたことが大きかった。

浅野◎最終的には斎藤先生の許可なんですね。

若木◎よく許してくれたよなぁ。斎藤先生はその時はもう学部長か、次長くらいだった。このころ電気科の横地伊三郎先生のところでは、職員を東大の物理科に内地留学をさせていたから、それなら建築だってやればいいということで、許可したんだね。それから、宮川先生も前川先生の仕事に興味があって、積極的に吸収したいと考えていた。

広田◎前川事務所に行きつつ、学校にも行っていたんですか。

若木◎そうよ。毎週土曜日には学校に来ていました。行くと宮川先生に「前川先生はなにをしてた?」って、よく聞かれました。僕が先生の立場だったら、助手に「行って来い」なんてよう言わんですよ。(笑)

広田◎給料は日大から出ていたんですか。

若木◎そう、日大からもらっていた。

浅野◎若木先生が前川事務所からもどってきてから5号館が始まったんですね。

若木◎そうそう。5人くらいをスタッフにして学校で図面を描きました。構造は村内明先生で、基礎のシェルが加藤渉先生。

浅野◎1階のピロティのレリーフが生産工学部で教授となられた小野襄先生ですよね。

若木◎あのプレキャストはミナト建材が担当した。プレキャストサッシュとアルミサッシュを使って、いわゆるテクニカルアプローチをやったわけ。間仕切りも全部共通にして、取り替えられるようになっている。

浅野◎5号館のことを前川先生にお話されましたか。

若木◎僕が前川事務所から帰ったばかりだったから。5号館には前川スピリットがいっぱい詰まっている。

浅野◎具体的に前川先生が関与したんですか。

若木◎僕が図面をもっていったこともある。エレベーションを見たときは、「ここに線を入れるべきじゃないか」って、つーっと1本線を描いた。僕はここまで言うのかって感心したよ。でもなにか言ったのは、この時くらいですけどね。

広田◎そんな経緯があって、5号館は59年に竣工したんですね。

生産工学部ができたころ

広田◎ところで若木先生が生産工学部に来たのは、創設時の1965年ですか。

浅野◎いや、兼任のかたちで64年には来ていたはずです。僕が生産工学部の1期生で65年に入学した時、若木先生は専任講師扱いでした。

広田◎最初はどんな感じだったんですか。

浅野◎小島重次先生が主任教授でした。66年の僕らが2年生のときにBS(Brother System)という、1年から4年までの縦割のグループをつくって学生指導を始めました。発案は小島先生だったらしいです。それで毎年春にBS祭というイベントを日大両国講堂で開催していました。最初の年に前川先生を呼んで講演をしてもらった。

1968年(昭和43)に学生が呼んで実現した前川國男先生の講演。生産工学部の食堂で

広田◎この時前川先生は理工の客員教授ですよね。生産工学部のスタート時は清水一先生が教授で、佐藤孝義先生が助教授で、若木先生が専任講師という3人が建築計画を担当している。

若木◎清水先生は大成建設の設計部にいて、昔の富士銀行本店とかバリバリ設計実務をやっていた人です。1964年に大成を辞めて自分で設計事務所をやっていた。また軽妙な語り口のエッセイストでもあった。

浅野◎清水先生が僕らに残したのは、「古きを訪ねて、新しきを知る」ということ。清水先生が建物や日本の伝統的建材をリストアップして、それを元に学生が旅行の企画を立てて一緒に見学に行く。それが長い期間続いたんです。

若木◎行くところは、まともに申し込んだら見られないところばかり。唐紙の唐長だとか、大仏瓦とか、北山杉だとか。

浅野◎岡山の倉敷の畳表のところも行きましたよね。

若木◎山口の宇部に行ったら、大成にいたころの清水先生の弟子たちが待っていたりして。

浅野◎20回くらい僕らが企画しました。

広田◎それが国内研修旅行の始まりだったんですか。この旅行は今も続いていますよ。

若木◎現場に行くと、裏情報というか、本音というか、表に出ない話をしてくれるわけ。学生がそれを直接見たり聞いたりできることに意味があった。清水先生と一緒に旅行をして、僕もいろいろ勉強になりました。

広田◎この旅行で僕も日本中を旅行しました。

若木◎紛争のちょっと前ですよ。BSなどのシステムをみると、小島重次先生はしっかりしたアイデアをもっ

Asano Heihachi
1945年福岡県生まれ。69年日大生産工学部建築工学科卒業。71年、日大大学院理工学研究科建設工学専攻修了。89年「地域集会施設の機能構造に関する研究」で工学博士取得。94年より生産工学部建築工学科教授。2007～10年日本公民館学会副会長。08年より生涯学習開発財団奨学金選考委員。10年より大工育成塾企画運営委員会委員長。

1967、68年ころに、都内のホテルで行った年度始めの学科打ち合わせ。いちばん右が清水一先生、その隣が亀井幸次郎先生。（写真左）1970年ころの学科の集まり。立って挨拶をしているのが小島重次先生。（写真中）同じころの村松貞次郎先生。（写真右）

て新しい建築学科を創り出そうしていたのがわかります。小島先生が紛争で辞めさせられなかったら、生産工学部の歴史は変わったんじゃないかと今でも思います。

実務にこだわった設計教育

若木◎東大の生産技術研究所にいた村松貞次郎先生も、生産工学部に大きな影響を残した人だと思います。「これからの時代は、請負（ゼネコン）の設計部にもっとちゃんとスポットをあてないといけない」という認識をもっていた。

浅野◎ゼネコン設計部は建築家協会に入れなかったですからね。設計をやっていても建築家とは名乗れなかった。

若木◎村松先生の『建築家山脈』という本も、その流れでつくったんですよ。

浅野◎それで村松先生が67年のBS祭で、現場管理、施工管理、これからのゼネコンをテーマに、『新建築』編集長の馬場璋造さんやゼネコンの人事の方をよんで、両国で大シンポジウムを開催したんです。

広田◎若木先生と浅野先生が会ったのはこのころですか？

浅野◎65年に入学してずっと若木先生のところに入り浸っていました。ちょうど村松先生の『日本建築山脈』が出版されたばかりで、若木先生の提案を元にして仲間でこの本をテキストにパネルをつくったら、理工学部の近江栄先生がとても評価してくれたんです。そんなことがきっかけとなって、仲間の集まりが研究会につながっていきました。

広田◎へぇ〜、それが建築生産研究会のスタートだったんですか。僕は今その会の顧問をしてますよ。

浅野◎もう一方で初期の生産の学生をひっぱったのは黒沢隆先生。津田沼でフランク・ロイド・ライト研究会をつくっていたんです。ものすごい勢いのある学生のサークルでした。先輩に天野彰さんもいました。

若木◎谷川正巳先生がまだ工学部にいらしてないころですね。

浅野◎ええ。理工の計画系は論文より設計を重視する傾向があって、修士論文は4ページでよかったという話を聞きました。生産は計画系でも論文がなければならなかったから、早くからちゃんと書いていた。宮川先生がこちらにいらしたとき、「生産の方が論文すごいなぁ」と言ってくれたことを覚えています。

若木◎そういえば宮川先生には、建築学会なんて辞めちゃえと言われたことがありました。論文にはあまり興味を示さず、もっとほかの勉強をしろと。

浅野◎作家とか建築家という意識が強かったのではないですか。生産はゼネコンの設計本部長だった清水先生が来て、設計計画のトップとして教育を始めた。そこが理工と違うんだと思います。

広田◎ゼネコンのトップが設計教育のトップになったということは、机上で理論を展開するというより、かなり実務にこだわったということでもあるんですね。

若木◎気持ちの上では、理工に追いつけと思っていたし、こちらも独自のいい雰囲気がありました。そんなことで65年に初めて公民館が掲載された建築学会資料集成が発行されました。これが公民館研究の始まりとなった。68年には建築学会地域施設計画研究委員会ができてその創設委員となった。そして73年には横浜市で第1号のコミュニティーセンターが竣工し、開設当初の使われ方調査を研究室で行ったのです。

第2、第3の黄金期

浅野◎68年に紛争があって小島先生が辞めるなど、ちょっとガタガタしました。その後に生産が息を吹き返したのは、キラ星のような教授陣が来た時です。計画系でいえば、照明工学の小木曾定彰先生、設計の神谷宏治先生、建築経済の谷重雄先生、建築史の山口廣先生、防災工学の亀井幸次郎先生、風工学の亀井勇先生、環境工学の勝田高司先生。教員には学会賞を受けた人が7名もいた。

広田◎どういう経緯で来られたのですか。

若木◎多くは坪井善勝先生のつながりと聞きましたが。

浅野◎このころから日大の生え抜きでない人が教員の3分の1くらい占めていて、今に至るまでずっと続いている。これも理工と違う点。純血ではなく、いろいろな血が入っていることがよかった。

若木◎僕ら、かえってそういう状態でやりやすいこともありました。輝かしい経歴をもった方々ですから、バックに連合艦隊が控えているみたいでした。

浅野◎77年には、生産自前の学科機関誌「築（きずく）」を創刊しました。そのときに、谷先生が「築（きずく）」という名前をつけたのですが、この字は土と木と竹と瓦を表します。これが伝統建築の生産に関わるものだ、という位置づけをしてくれたんです。

広田◎この時のメンバーって、ほんとうにすごいですよね。

若木◎そう。小木曾先生は環境設備が専門ですが、超高層の景観に関する立面建ぺい率のことをやったり、亀井幸次郎先生は東京海上ビルを壊すときに火をつけて避難の実験したり、谷先生は元は北海道の建築部長で、しかも伊勢神宮の遷宮の技師のトップを務めていました。

広田◎社会が成長期で、スタッフが不足していて、要請したら結果的にそういう方々が集まったということですか。

浅野◎それに学園紛争も関係してきます。紛争のときに、辞めた先生がいる。先生が辞めていくのに、学生数はどんどん増えていきました。そこで、錚々たる教授陣が入ってきたんです。ただ、その方たちは雑用をあまりしなかった。若木先生がマネジメントを一手に引き受けた。そういう点で若木先生はとても苦労されています。

若木◎生産の特徴で言うと、ユニークなのが生産実習という授業。

浅野◎そうですね、われわれ1期生からありましたから。3年生から4年生にかけて、延べ1か月間企業に行って実習する。

広田◎僕も学生の時に1か月行きましたね。

若木◎学生は迷惑だったろうけど、そこで気がついたり、やる気を起こしたりする。相手の会社も学生を通して、新しい人間関係が築ける。そして、連合艦隊の先生方が口々に言っていたのが、「ここの学生って、可愛いねぇ」、「いい子が多いね」と。それでまとまってきて、非常にいい学びの環境が築けたと思う。

浅野◎若木先生が学科主任としてなさった仕事に、居住空間デザインコースの設立があります。1991年に宮脇檀さんを迎えて、このコースをつくるんです。これが生産の第3の変革期になります。

若木◎学科を活気づけて、応募を増やそうとして考えた案が女子コースだった。計30人の女子コースで優秀な人を育てようということで、始めは亡くなった建築家の林雅子さんに白羽の矢を立てたんです。僕が交渉にいったら喜んでくれてね。でも、母校の日本女子大でも教えていたから、そこを抜けるわけにいかないということで実現しなかった。そうこうするうちに、宮脇檀先生に来てもらうことになった。

浅野◎その宮脇先生の人脈で、非常勤の中村好文先生、中山繁信先生、木下陽子先生に来てもらうことになりました。専任で曽根陽子先生も入られます。このコースの講義録が出版されていて、もう2冊目になりますが、異例のベストセラーですよ。

広田◎話は尽きませんが、最後に現役の学生へひとことお願いします。

若木◎生産工学部は理工がやらなかったことを補完するようなこともあったけど、宮川先生の門下生として関沢勝一先生が理工学部で「学校建築」を、佐藤平先生が工学部で「福祉施設」を、そして私が生産工学部で「社会教育施設」を、建築計画研究としてはじめた。計画の基礎研究や地域施設計画など、独自の研究成果が実っている。歴史を踏まえ、ぜひこうした先人が築き上げたものを継承していってほしいですね。

創設のころの国内研修旅行を再現して、2008年に京都熊倉工務店作業所で行った、伝統技芸の実技研修

Hirota Naoyuki
1959年北海道生まれ。84年日大生産工学部建築工学科卒業。86年日大大学院生産工学研究科建築工学専攻修了。99年「生涯学習関連施設のオープンスペースに関する研究」で博士（工学）取得。2010年日大生産工学部建築工学科教授。06〜09年、千葉県新しい地域社会づくり研究会会長。07〜09年日本建築学会総務理事。11年より千葉市住宅政策審議会委員。

トピックス◉第２回日本大学桜門建築会学生設計コンペティション結果報告
テーマ／建て売り住宅

日本大学各学部、大学院の在学生を対象とする設計コンペ「第２回日本大学桜門建築会学生設計コンペティション」が、昨年の12月11日に開催された。今回は本学を卒業し、日本を代表する建築家のひとりとして活躍する山本理顕氏を審査員にお招きした。

応募は78点

桜建会が主催するこのコンペティションは、昨年12年ぶりに復活し、今回で第２回目になる。応募対象は日本大学・大学院に在籍するすべての学生で、設計テーマは山本理顕氏により「建て売り住宅」となった。その内容は、山本氏自身が設計した「ドラゴン・リリーさんの家(2008年完成)」に隣り合う敷地に建て売り住宅を設計するというもの。しかも単なる住宅ではなく、店舗併用住宅の計画が求められた。法規上の制約を守ればどんな形態の住宅でもよく、店舗の種類も自由に想定できる。元々周辺には店がなく、ここに店をつくることで近隣地域が活性化するようなもの、住宅として売れそうなものが求められた。８月の応募概要発表から締め切りの11月４日までに各学部・学科より78点の作品が集まった。１次審査で10点を選抜。12月11日の２次審査では、１次で選ばれた学生がプレゼンテーションを行う公開審査が行われた。

最優秀賞はミニ開発

審査の結果、最優秀賞として選ばれたのは「境界線上の物語 境界線はアクティビティーをつくりだす」と題された村山・三角案。ひとつの敷地を分割して複数の建て売り住宅をつくる、いわゆる「ミニ開発」を想定した提案。しかし、その敷地境界線を住戸内に取り込むことで、通常は住戸間にできてしまう隙間を中庭として利用している。中央には小さな商店街となる路地が通り、花屋、ケーキ屋、古本屋などが並ぶ。山本氏の講評では、「ミニ開発」を快適にする提案として、今回の「建て売り住宅」というテーマに対して素直に応えていることが高く評価された。外観デザインが気になるものの、これが今までの建て売り住宅のかたちを批判的に利用しているのであれば、その点も評価できる。一方で、５世帯が一緒に住むことに対して、例えば高齢者が住むとどのようなことが考えられるかというような設定を加えることで、１階の計画がさらに発展できたのではないか、といったコメントもつけくわえられた。

優秀賞の３点の講評

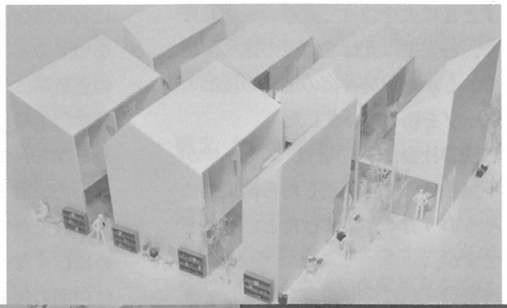
最後まで最優秀賞を競いながら、残念ながら選に漏れたのが優秀賞に選ばれた「75m テーブルハウス まちの喫茶食堂」の森本案。75m にもおよぶテーブルが折れ曲がりながら住宅内部にさまざまな場所をつくりだすという提案であり、公開審査での発表では、「ドラゴン・リリーさんの家」にまでテーブルが延びてゆく様子が示された。講評では全体のデザインが評価されたが、テーマに対する答としては村山・三角案には一歩およばなかった。

続く優秀賞には、「山の上に立つ木とそれを囲む階段の家」の遠藤案、「だがしやの家」の南・清水・野田案が選ばれた。遠藤案は１本の木を住宅が取り囲む案であったが、講評では空中に浮いているかたちはおもしろいが、浮いた部分と下が螺旋階段のみで接続される関係性や、構造的な面で問題があると指摘された。

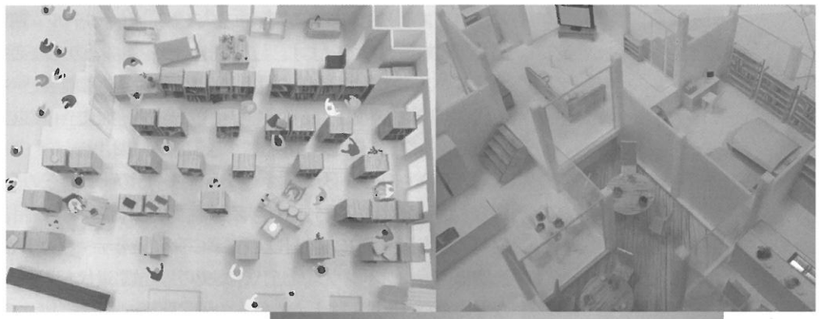
南・清水・野田案は有機的な形態による板状のものが、スリットを保ちながら積層されている提案であった。講評ではその構造が評価されたが、駄菓子屋だけに特化せずに、もっとフレキシブルなものとして提案すべきだったと述べられた。

また、応募作のほとんどが周辺状況を図面に表現していなかったことを、山本氏は問題視していた。周りを描くことにより自分のアイデアも刺激されるので、周辺こそ描き、そこにどんな影響がもたらされるかを訴えることがコンペでは重要であると述べた。確かに今回のコンペのテーマ自体が、周辺環境に貢献する住宅の提案であったのだから、当然の指摘でもあった。

公開審査の後に山本氏によるショートレクチャーも行われ、国際コンペで選出された自身のチューリッヒ空港施設を動画などとともに紹介した。その後は応募者が一堂に会し、山本氏を囲む懇親会を行った。来年度もまた、同様な学生設計コンペを行う予定である。さらに多くの学生からの応募を期待している。末尾ながら、真摯に審査をしていただいた山本理顕氏に心より感謝の意を表したい。(日本大学桜門建築会学生設計コンペティション実行委員会委員／佐藤慎也)



1次審査で１点１点ていねいに応募作をみる山本理顕氏(写真上左)。最優秀を受賞した村山寛子・三角奈津紀案の「境界線上の物語」(写真上右)。優秀賞の３点は、森本栄貴案の「75m テーブルハウス」(写真下左)、遠藤孝弘案の「山の上に立つ木とそれを囲む階段の家」(写真下中)、南雅博・清水良輔・野田香織案の「だがしやの家」(写真下右)



佳作を受賞した菅原雄太案の「あなたとわたしの本屋さん」(上左)、沼崎一也案「Free house」(上右)、増田佳菜子・小山勇気案の「町と住む家」(中)、田中麻未也案の「7本の建築と２つの広場」(下左)、伊藤由華・大川朱音・川上玲奈案の「引き出す家」(下中)、本山哲生案の「タイル間のお花屋さん」(下右)

審査結果表

最優秀賞／村山寛子・三角奈津紀(理工建築４年)

優秀賞／森本栄貴(理工建築M1)、遠藤孝弘(理工建築M2)、南雅博・清水良輔(理工建築４年)・野田香織(理工建築３年)

佳作／田中麻未也(理工建築M1)、本山哲生(理工建築４年)、伊藤由華・大川朱音・川上玲奈(理工建築３年)、増田佳菜子・小山勇気(理工海建３年)、菅原雄太(生産工M1)、沼崎一也(生産工M1)

応募総数／78点　内訳／理工建築63点、理工海建７点、生産工８点

＊最優秀賞、優秀賞の４点は、表紙にも作品写真を掲載しています。

研究テーマ　**日欧の20世紀建築の発展と交流についての建築史・建築論的研究**
ドイツにおける建築・デザインのモダニズム、その成立と伝搬のプロセス

研究室名　田所研究室
教員名　准教授・田所辰之助
キーワード　20世紀建築／モダニズム／ドイツ工作連盟／ジードルンク／バウハウス／ドコモモ
企業等への要望　☑共同・受託研究の要請　□計画・設計等の協力　□研究成果の事業化等　☑その他（セミナー・講演）

研究概要

バウハウスなどで知られる時代に先んじて、ヴィルヘルム期と呼ばれる第一次世界大戦前のドイツの近代建築を研究対象にしています。建築のかたちや空間よりもまえに思想が変わる。その変化のサインをいかに見つけるか、がテーマです。京都国立近代美術館の展覧会「ヘルマン・ムテジウスとドイツ工作連盟 ドイツ近代デザインの諸相」展や叢書「都市・建築・歴史」（東京大学出版会）の第九巻『材料・生産の近代』などに成果を発表しました。

同展覧会をきっかけに美術・デザイン分野の研究者との交流が生まれ、「近代工芸運動の総合的国際比較研究」（大阪大学）、「日独百年の建築・都市計画における相互交流」（神戸大学 CEO プログラム）などの共同研究に参画しました。日欧の建築の交流史をテーマにした神戸大学との共同研究は興味深く、その問題意識は連続シンポジウム「近代建築史の最先端 近代（日本）×近代（西洋）」（建築学会近代建築史小委員会）などの企画へ展開しました。日本の近代建築へもいま注目が集まっています。ドコモモ・ジャパン主催の連続セミナー「日本のモダニズム建築を解読する」、国際シンポジウム "METAL IN MODERN MOVEMENT ARCHITECTURE" などの企画・運営を通じて、近代建築の保存問題へも取り組むようになりました。

建築史をなぜ学ぶのか、常に自問しなければならない問題だと思っています。「言葉」を立ち上がらせること、このことによって建築史は過去についての学問ではなく、建築設計も支援し得るアクティブな学際分野になります。この点をつねに念頭に、学生の皆と対話していきたいと考えています。

ドコモモ・ジャパンのセミナーで訪れた幻庵(石山修武設計、1975年)。施主夫人を囲んで

連絡先◎日本大学短期大学部建設学科 船橋校舎5号館4階 tel. 047-469-5566　E-mail・田所 tadokoro@arch.jcn.nihon-u.ac.jp

研究テーマ　**だれもが快適、安心、安全な生活環境をつくるための技術的探求**
建築、まちづくりにノーマライゼーションの理念を実現する

研究室名　八藤後（やとうご）研究室
教員名　准教授・八藤後 猛
キーワード　高齢者／障害者/子ども／バリアフリー／福祉住環境／福祉のまちづくり／建築安全計画
企業等への要望　☑共同・受託研究の要請　☑実作・試作等の協力　☑研究成果の事業化等　□その他（　　）

幼児の建築安全計画のための実験

研究概要

研究室の発祥は、1950 年代に遡ります。当時劣悪だったわが国の高齢者施設を建築面からはじめてアプローチした木下茂徳先生、そして対象を障害をもつ人のまちづくりや住環境に広げて、今日のバリアフリー法や福祉住環境の礎を築いた野村 歡先生から引き継いでいます。

本研究室では、住宅を含めたすべての建築やまちを「社会的なもの」と考えています。すなわちすべての人の平等をうたったノーマライゼーションを実現する手段としての「環境整備」を行う技術的方法を探求しています。そのため単体の対象者や特定の建築物等にこだわらず、広い範囲で活動を行っています。最近では、子どものための建築やまちの安全、子ども連れによる公共施設利用（いずれも企業ならびに他大学との共同）といった研究成果が、まちづくり指針等に反映されるように働きかけています。

連絡先◎日本大学理工学部建築学科 駿河台校舎5号館8階585A室　tel. 03-3259-0715　E-mail・八藤後 yatogo@arch.cst.nihon-u.ac.jp

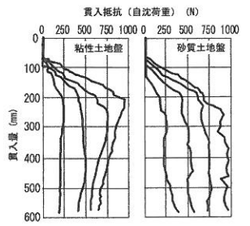
研究テーマ　**建築構造物と地盤とのかかわりに関する諸問題**

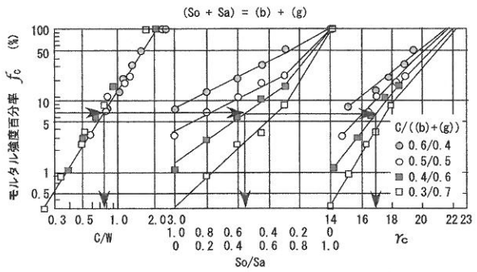
研究室名　地盤工学研究室
教員名　教授・川村政史
キーワード　地盤改良／土構造物／免震地盤／環境問題／ SWS
企業等への要望　☑共同・受託研究の要請　☑計画・設計等の協力　☑研究成果の事業化等　□その他（　　）

研究概要

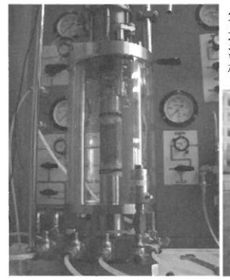
当研究室では安全で安心して住める建築構造物の建造を目指して①地盤改良、②免震地盤材料の開発、③環境問題に配慮した土構造物の版築構法、④小規模建築物のための SWS(スウェーデン式サウンディング) 試験における自沈性状の把握等の研究を行っています。

①地盤改良は主に土にセメント系固化材を攪拌混合する深層混合処理工法および流動化ソイルセメントについて研究しています。特に固化材が水和反応するための土に含まれる最適な有効水についての基礎的なところを研究しています。②免震地盤材料の開発では木片チップや再生骨材等の建設廃棄物にアスファルトをつなぎ材として用い、地盤内に設置した場合の減衰性および周期等について短期大学部の下村教授、酒句専任講師と共同で研究しています。③版築構法は粘性土：砂を 3:7 の割合で使い、そこに消石灰を混入して締め固めて小屋を建造し、構法および快適性等を研究しています。④ SWS の自沈性状の研究は自沈する地盤はどの程度軟弱なのかを沈下量を考慮して調べています。





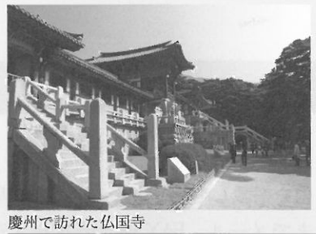
グラフ上は、目標の自沈荷重の硬さになる様に作製した地盤で実施した自沈荷重と貫入量との関係。グラフ下は、土の有効水を考慮したソイルセメントの調合設計のためのノモグラム



写真左は、振動三軸試験による免震地盤材料の振動性状測定(短期大学部酒句研究室所有)。写真右は、 版築構法により建造した小屋

連絡先◎生産工学部建築工学科津田沼校舎5号館3階　tel. 047-474-2490　E-meil・川村 kawamura.masashi@nihon-u.ac.jp

2010年度 桜建会研修旅行報告


慶州で訪れた仏国寺

三清閣の千秋堂で行われた懇親会での記念撮影

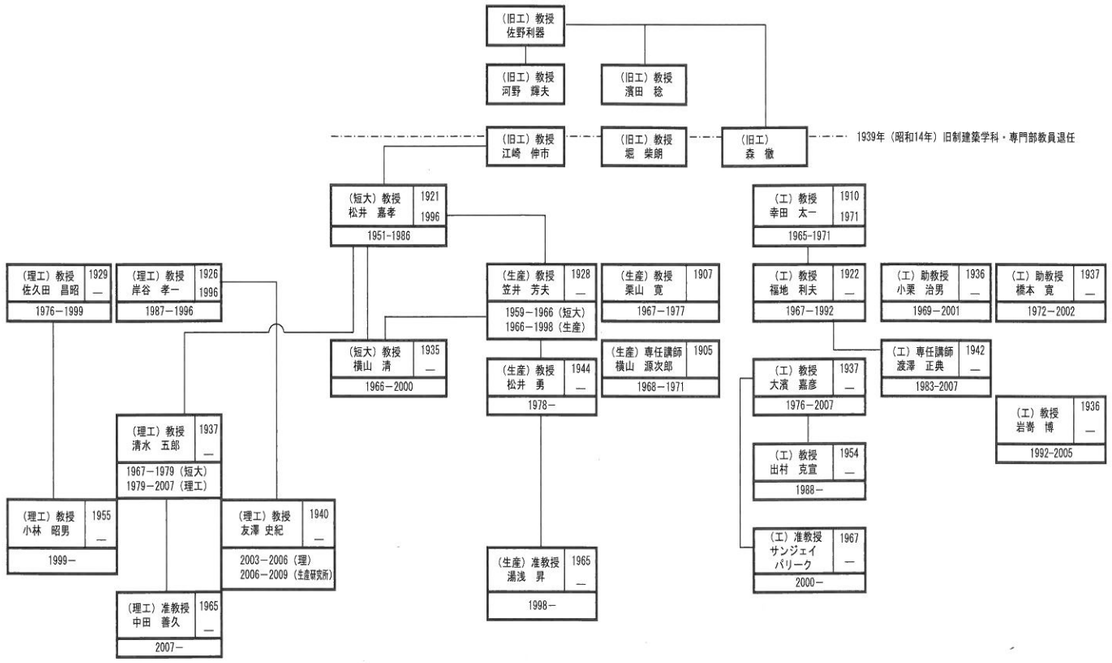
昨年の桜建会の研修旅行は、会長の片桐正夫先生と事業委員長の根上彰先生の引率で、韓国のソウルと慶州へ行きました。日程は 10 月 15 日（金）～ 18 日（月）の 4 日間で、片桐正夫先生、根上彰生先生を含め、総勢 16 名が参加しました。両先生の研究室では大勢の韓国からの留学生を受け入れており、卒業生たちが韓国の各方面で活躍しています。今回の韓国行きは、ぜひ韓国にも桜建会の支部をつくりたいとの意向をもつ卒業生たちと本学の OB の方々との交流が大きな目的のひとつとなっていました。

到着した 15 日はソウルの青瓦台の裏手に位置した閑静な山の中にある三清閣の千秋堂で、懇親会が行われました。迎えてくれた韓国側のメンバーは 16 名。自己紹介や大学での思い出などを語り合い、大いに盛り上がりました。16 日、17 日は韓国の古都慶州の旧跡「臨海殿址」や「雁鴨池」、「石窟庵」、「仏国寺」を巡りました。最終日の 18 日は、元文化財庁にいた OB の崔さんのアテンドで、歴史的建造物であるソウルの徳壽宮の改修工現場を視察しました。

旅行に参加した副会長の腰塚達郎さんの旅行記が、桜建会のホームページにアップされていますので、ご興味のある方はぜひご覧ください。
桜建会ホームページの URL http://www.okenkai.jp/

お詫びと訂正

前号に掲載しました日大建築山脈［材料系］の山脈図に誤りがありました。ご指摘に感謝するとともに、関係者の方々にお詫び申し上げます。ここにご指摘いただいた部分を訂正した樹形図を再度掲載いたしますのでご確認ください。



事務局だより

ＨＰ「会員だより」への情報提供のお願い

当会のホームページには「会員だより」というコーナーがあります。ここでは会員の皆さまの同窓会のお知らせや、講演会、著作物等のご案内を掲載しておりますので、事務局までメール、FAX 等で情報をお寄せください。ご連絡をお待ちしております。

会員の方々への情報提供について

桜建会では会員の皆さまの同窓会などの開催に必要な情報をご提供しております。情報提供の対象は、当会正会員、あるいは特別維持会員の方々に限ります。情報入手に際しては、所定の手続きが必要となりますので、詳しくは事務局までお問合せください。

ｅラーニングを受講して、１級建築士試験合格！

桜建会が受講を推奨するｅラーニング講習で、昨年合格者がでました。2007 年に大学院理工学研究科不動産科学専攻を修了し、現在住宅保証機構に勤務する寶泉立夫さんです。

そこで寶泉さんに難関１級建築士試験合格を勝ちとったｅラーニング活用法を、手記のかたちで寄稿していただきました。

昨年のｅラーニング 合格率は、1 級学科受講者８名のうち、実際の受験者は７名。学科の合格者は３名で、合格率は 42.9%。製図の受験者３名のうち１名が合格し、最終的な合格率は 14.3%（2010 年度全体の合格率は 10.3%）となりました。

ｅラーニング、とっておきの活用法

私はひとつの単元を、1・2 日目に予習、3 日目にｅラーニング講義を受講、4・5 日目に過去問を解く、という 5 日間サイクルで進めていきました。こんな私を合格に導いてくれた、ｅラーニングのとっておきの活用法をふたつご紹介いたします。

私の場合、平日は朝早起きして会社で約２時間、夜は自宅で約２時間と合わせて４時間程度、また、休日は自宅で約４時間と、時間も場所も関係なく勉強できました。「いつでもどこでも質の高い勉強」、これがひとつめの活用法です。

ふたつめは、「苦手分野は映像講義を繰り返し受講して克服する」です。これはｅラーニングならではの勉強法だと思います。

これから建築士試験を受験する皆さまもｅラーニングをうまく活用して、合格目指してがんばってください。

寶泉立夫（(財) 住宅保証機構技術管理部）

新入特別維持会員のご紹介

新規入会者 氏名／卒業年／勤務 （平成22年11月26日～平成23年2月15日） 6 名

神田 廣行	理工建 -51	(株) 神田建築設計事務所	田嶋 和樹	理工建 -H11	日本大学理工学部
清水 昭治	新工 -36		冨田 隆太	理工建 -H11	日本大学理工学部
粂 孝男	生産工 -54	大和小田急建設 (株)	川島 和彦	理工建 -H7	日本大学理工学部

訃報

昨年９月 21 日に本会特別維持会員・本会評議員の吉田義男氏 (新工―28 卒) が逝去されました。享年 82 歳でした。吉田氏は、長年「新建築社」の社長として活躍され、本会にも多大な貢献をされました。謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

桜建会報 NO.90 2011-March
発行人 片桐正夫
編 集 桜門建築会広報委員会
〒101-8308 千代田区神田駿河台1-8-14
日本大学理工学部内

広報委員会
委員長 横内憲久(理工学部建築工学科)
副委員長 塩川博義((生産工学部建築工学科)
委員 佐藤慎也(理工学部建築学科)
山本和清(理工学部海洋建築工学科)
亀井靖子 (生産工学部建築工学科)
サンジェイ・パリーク (工学部建築学科)
羽入敏樹(短期大学部建設学科)
西山麻夕美(フリー編集者)
平野香奈子 (千葉県庁)
五十嵐賢博(綜建築研究所)

桜建会事務局
住所・所属の変更、クラス会の開催、投稿、会費、名簿など桜建会全般についてお気軽にご連絡、お問い合わせください。
理工学部5号館7階574A号室
TEL03-3259-0649 FAX03-3292-3216
E-mail kaiin@okenkai.jp
ホームページ http://www.okenkai.jp/
専任／星野麻衣子
非常勤／関根光枝、櫻井佐和、大木明子
業務時間／AM10:00～PM5:00(月～金)

斎藤賞・加藤賞・桜建賞 2010年度受賞者一覧　＊受賞作品の紹介は次号に掲載いたします。

斎藤賞

堀川真之（理工学部建築／修士論文）
「収縮・クリープを考慮したFEMによるRC柱の長期・短期性能評価と構造物への応用」指導／教授・白井伸明

松本敬（理工学部建築／修士論文）
「継続的な運動トレーニングが脊髄損傷者の温熱環境適応能力に及ぼす影響」
指導／教授・井上勝夫、専任講師・蜂巣浩生、助教・三上巧生（生産工学部）

伊勢大祐（生産工学部／修士論文）
「UFC型枠を用いた高流動再生コンクリートハーフPCa梁部材の構造特性に関する実験的研究」
指導／教授・櫻田智之

和田成就（工学部／修士論文）
「アルミ薄板を用いたトラスの非線形挙動に関する基礎的研究」　指導／教授・倉田光春

加藤賞

及川寛永（理工学部海建／修士論文）
「震災時における水上輸送を活用した傷病者輸送の可能性に関する調査研究　–輸送水域と陸上輸送経路の危険性に着目して–」　指導／教授・近藤健雄、専任講師・山本和清

古谷真広（理工学部海建／修士論文）
「粗粒材養浜に伴う砂層形成の定量化とその数値モデルに関する研究」指導／教授・小林昭男

塩野谷文貴（理工学部海建／修士論文）
「プラスチックに由来する海洋環境汚染に関する研究」指導／専任講師・佐藤秀人、准教授・道祖土勝彦（薬学部）

桜建賞

奈良拓也、小田雄太（理工学部建築／卒業論文）
「重要文化財に対するバッファゾーン設定に関する環境工学的支援 - 銅御殿におけるビル風被害の検討と保護に向けた提案 -」　指導／教授・吉野泰子（短期大学部）

杉山正和（理工学部建築／卒業論文）
「鉄筋の配筋位置が金属拡張系あと施工アンカーの引抜き耐力に及ぼす影響」　指導／准教授・中田善久

鈴木沙綾（理工学部建築／卒業論文）
「波形手すりの使いやすさと視覚的評価に関する研究」　指導／准教授・八藤後猛

中村林太郎（理工学部建築／卒業論文）
「妙喜庵待庵における空間構成に関する一考察　–南面側面からの採光計画にみる内部空間の構成について–」
指導／教授・重枝豊、助手・小島陽子

石﨑駿平、清水裕章（理工学部建築／卒業論文）
「地方都市における「減築」を活用した賑わい創出に関する研究」　指導／教授・横内憲久

丸山義貴（理工学部建築／卒業設計）
「東京の群像　–外神田における職住型集合住宅の提案–」　指導／教授・今村雅樹

寺口敬秀（理工学部海建／卒業論文）
「漁業者と協調するダイビングスポット整備の利点と効果に関する研究　–漁業協同組合に対するアンケート調査結果に基づく考察–」　指導／教授・桜井慎一

桜建賞

田村憲史（理工学部海建／卒業論文）
「豊間海岸における海浜変形と施設建設の相互影響」　指導／教授・小林昭男

鈴木直（理工学部海建／卒業論文）
「海上公園の維持管理・運営に関する研究」　指導／教授・畔柳昭雄

土屋舞子、村瀬達也（生産工学部／卒業論文）
「照明による明るさのコントラストがパーソナル・スペースに与える影響に関する研究」
指導／准教授・岩田伸一郎

高橋康太、若林和貴（生産工学部／卒業論文）
「千葉県北西部の長周期地震動とやや深い地盤に関する研究」　指導／教授・櫻田智之、研究所教授・工藤一嘉

浅田祐加（生産工学部／卒業論文）
「密集戸建住宅の自然換気に関するコモンの影響」　指導／教授・丸田榮藏

多賀谷祐紀（生産工学部／卒業設計）
「可変桟敷 —みんなの椅子—」　指導／教授・浅野平八

Ifana Tjung（生産工学部／卒業設計）
「Up」　指導／教授・川岸梅和、専任講師・北野幸樹

三浦洵（工学部／卒業設計）
「境壊線 —新大久保架け橋学校—」　指導／准教授・浦部智義

有馬達也（工学部／卒業論文）
「フレーム構造の弾塑性地震応答解析に関する基礎的研究　—数値積分に基づく離散化マトリクスによる解析法—」
指導／教授・倉田光春

金内晋之介、関根裕樹（工学部／卒業論文）
「ポリマーセメントペーストを用いたピンニング補強法による歴史的レンガ造建築物の耐震補強に関する研究」　指導／准教授・サンジェイ・パリーク

太田成美、影山由季乃（工学部／卒業論文）
「階段昇降時の身体動作寸法とその特性に関する人間工学的検討」　指導／教授・若井正一

成島靖貴、星明彦（工学部／卒業論文）
「重量床衝撃音の評価方法の検討」　指導／教授・濱田幸雄

吉田悠真（短期大学部／ゼミナール制作）
「都市に吹く風　–神田神保町古本屋街に建つ複合型ライブラリーの計画」　指導／准教授・田所辰之助

梅沢慎也（短期大学部／ゼミナール制作）
「1／20縮尺模型を用いた音楽ホールにおける拡散体の効果に関する検討」　指導／准教授・羽入敏樹

学部ニュース

工 トピックス

◎石賀悠也君（浦部研・研究生）は、12月18日に建築学館ホールにて開催された「第14回TEPCOインターカレッジデザイン選手権（課題／ダメハウス）」で、応募総数397作品の中から最終審査10作品に入選し、佳作を受賞した。

生産工 本学教員が専門分野をわかりやすく解説した著書を出版

昨年、本学部の教員が関わり、各々の研究をまとめた著書が3冊発行されたので紹介する。

1冊目に紹介するのは『最新建築材料学』（発行／井上書院、2010年4月）。建築材料学の教科書は、材料の性質や製造方法を中心に記述されているものが多い。建築を勉強している学生から、課題で設計した建物に用いる材料をどのようにして選定したらよいか質問されることがある。建築材料は、建物の各部位の要求条件と材料の品質・性能を比較して、要求条件を満たす材料が選ばれている。そこで本書は、I編「構造と材料」およびII編「部位と材料」で構造・部位の要求条件、要求性能について記述し、III編「材料と機能」では、機能性材料の品質・性能を示し、IV編「基本材料」で従来の基本材料について性質・製造方法を記述。V編「材料の基本物性と単位」では、材料を選定する際に、材料の物性値を用いて比較するため、基本的な物性値の意味と単位について記述した。著者は、生産工学部の松井勇教授、湯浅昇准教授、工学部の出村克宣教授、理工学部の中田善久准教授の4名。本学各学部の材料学担当者が共同で執筆した。

2冊目は『眼を養い 手を練れ2　集まって住もう』（居住空間デザイン講師室　発行／彰国社、2010年11月）。渡辺康氏を中心とした居住空間デザインコースの教員による「眼を養い 手を練れ」の第2段。日本だけでなく世界の集合住宅を対象に、集合住宅の設計法がテーマに沿って書かれている。手書きの平面図・断面図が全体を柔らかいタッチに仕上げていて、図面を見るだけでも楽しい本である。

3冊目は『公民館のデザイン』（公民館学会編　発行／エイデル研究所、2010年12月）。編集委員会委員長は浅野平八教授。分担執筆は広田直行教授のほか、若木滋名誉教授の門下生が多数加わり、社会教育学と建築学の協働作業による専門書となった。

理工 海洋建築学科トピックス

◎2010年7月に神戸大学で日本沿岸域学会研究討論会2010が開催され、海洋建築工学科所属の学生3名が優秀講演賞を受賞した。

受賞者とタイトルは、花井健太（M1、近藤・山本研究室）「江戸東京における災害からみた河岸の変遷に関する研究」、寺口敬秀（4年、桜井研究室）「ダイビングスポット誘致が与える漁業者への影響と効果に関する研究」、塩野谷文貴（M2、佐藤秀人研究室）「漂着プラスチック由来の沿岸域汚染に関する研究」である。

理工 建築学科トピックス

◎木村翔名誉教授と西村敏雄名誉教授が、平成22年秋の叙勲で、「瑞宝中綬章」を受章した。

◎坂本英之君（中田研M1）の卒業論文「締固め作業中の棒形振動機と鉄筋の接触によるコンクリートの付着性状に及ぼす影響」が、「日本建築学会優秀卒業論文賞」（主催／日本建築学会）を受賞した。

◎桐山直己君（羽入研M1）が「第2回学生優秀発表賞」を受賞した。この受賞は、日本音響学会2010年秋季研究発表会で発表を行った「平滑化減衰エネルギ比による室内音場の拡散性評価に関する基礎的検討」によるもの。

◎永井佑季さん（岡田研D2）の「ホルン型張力膜構造の風荷重に関する基礎的研究（その3）設計用風荷重の提案」と落合涼子さん（新日鉄エンジニアリング、岡田研2010年修了）の「ストリング式骨組架構（SKELSION）の保有水平耐力に関する基礎的研究（その2）ストリング端部の偏心の影響とストリングのモデル化の検討」が、「2010年度日本建築学会大会シェル・空間構造部門優秀発表賞」を受賞した。